

土岐善麿と『萬葉集』

——『作者別萬葉短歌全集』（一九一五）を起点として——

河 路 由 佳

一 はじめに

土岐善麿（一八八五—一九八〇）は、同年生まれの若山牧水（一八八五—一九二八）、北原白秋（一八八五—一九四二）と早稲田大学で共に学び語り合った二十代の初めから十年余り、土岐哀果という筆名を用いた。土岐哀果といえ、ローマ字三行書きの歌集『NAKIWARAI』（一九一〇）で颯爽と登場した青年歌人で、石川啄木（一八八六—一九二二）と親しく交流し、その三行書き短歌に影響を与えたばかりか、早世した啄木の作品を世に出すのに尽力したことでも知られる。

その哀果が『NAKIWARAI』から五年、三〇歳の年に『作者別萬葉短歌全集』（一九一五）を刊行した。その後長歌等を加えて『作者別萬葉全集』（一九二二）として完成されるこの

本について、冷水茂太は「土岐善麿の数多い著作の中で、もつとも広く読まれ、もつともよく売れた本であったであろう。（冷水一九八五、三二八頁）」と述べている。

一九一八年ごろ、彼は「哀果」という筆名から離れ作歌を五年ほど中断、その後の六〇年余りは本名の善麿を使い、短歌をはじめ新作能やローマ字運動、国語審議会議長や日比谷図書館長なども務めて、言葉にかかわる文化活動に幅広く活躍した。一九三七年に日中戦争が全面化してからアジア太平洋戦争が日本の降伏で終わる一九四五年の夏までの、日本社会全体が戦争に巻き込まれていく時期に、『萬葉集』は戦争協力を促す国民統合の象徴としての役割を帯びて「国民」に広く親しまれた。善麿が六〇歳の年に迎えた敗戦は、その人生の大きな転換点となった。戦争中の田安宗武研究を契機に戦後は学究の道を歩む

善磨の戦中戦後を支えたのは、『萬葉集』への信頼であったと思われる。

本稿は、『作者別萬葉短歌全集』を起点として、敗戦前後の一九四〇年代に重点をおきつつ、善磨と『萬葉集』の生涯にわたる関係について検証し、考察するものである。

なお、本文中の引用について、原則として漢字の字体は現代一般に用いられているものに改めて示す。引用文中の「…」は、河路による中略、亀甲内は河路による説明である。

二 『作者別萬葉全集』の編纂と三人の『萬葉集』 研究家との出会い

『NAKIWARAI』の作品は、体裁も内容もおよそ『萬葉集』とは無縁に見える。

Toku yori kite kau mono wo,

Hitotsu dani yokei wa irezu,

Pan-ya no Musume.

青春性のある抒情的な作品の中に、このように密かな心の機微を掬い取ったような作品があり、石川啄木の『一握の砂』がそうであるように、今日も新鮮さを失っていない。

早稲田大学では英文学を専攻、ロシア文学にも関心の高かった哀果は、学生時代、ツルゲーネフの全集を買うために父の蔵書の「大部な和本の『萬葉集』」を売ったことがある（土岐

一九一五、二二頁）³。「萬葉集も何もあるものか、僕は僕の感情思想乃至生活を僕の現代語でうただけだ（同二三頁）」と思っていたという哀果は、『萬葉集』を読もうとしなかったのである。その哀果が、一九一五年十一月に『作者別萬葉短歌全集』を刊行したのは如何なる事情によるのだろうか。

哀果は、『作者別萬葉短歌全集』巻末の「編纂手記」に先立って、月刊誌『生活と芸術』の同年八月号に『萬葉短歌全集』編纂手記』を発表している。また、冷水茂太（一九八五）に、善磨本人の目を通してから発表したという『作者別萬葉全集』のてんまつ（二一九四―三一八頁）がある。それらによって編纂の事情を時系列順に整理すると次のようになる。

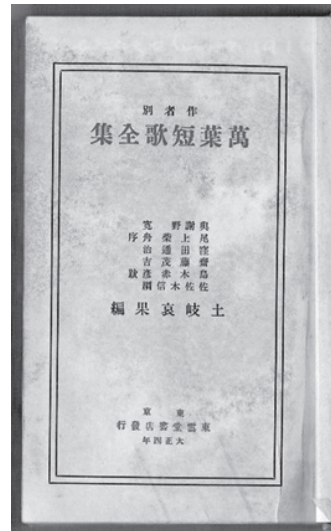
（一）一九一五年五月、読売新聞社の記者生活と並行して雑誌『生活と芸術』の発行、執筆等で多忙を極めた善磨が「神経衰弱症状」に陥り、医師の勧めで十日間の休暇をとって「しづかな寂しいところ」を探して一人、伊豆大島に行った。

（二）帰ってからも症状が続き、医師が「一つのこと」に精神を集中させるとよい」と勧めた。そこで、善磨は、気になつていた『萬葉集』を読もうと思ひ立った。

（三）善磨は「尊重するにしても尊重しないにしても」『萬葉集』は通読すべきであると思つていたが読みにくさに阻まれ、作者別にまとめて漢字かな交じりの表記にしたものだけと並べたらどんなに読みやすいかと思つていた。集中を要するこの作業は、神経衰弱を治療するのにもつてこいの



土岐善麿〔編著〕(1928)『作者別萬葉全集』上巻』(アルス)の扉(河路蔵)



土岐哀果〔編〕(1915)『作者別萬葉短歌全集』(東雲堂書店)の扉(河路蔵)

作業と思われた。

(4) 佐佐木信綱に相談し、訓や作者の考証は鹿持雅澄の『萬葉集古義』(一八七九)⁶⁾によるのがよいというアドバイスを受けた。これに基づいて一首ずつカードにとりて並べ替える作業を始め、特に八月は妻子を三浦三崎に行かせて、その留守中、作業に没頭して原稿を完成した(冷水一九八三、五七頁)。

新進気鋭の土岐哀果は支援者に恵まれ、序文は与謝野寛、尾上柴舟、窪田通治(空穂)、跋文は斎藤茂吉、島木赤彦、そして佐佐木信綱と、当代の著名な歌人たちが流派を超えて揃い踏みしている。思い立ってから半年という超高速で完成した「労著」であった。出版後、たちまち話題になって版を重ねるが、好意的な評価の多いなか、古泉千樞が『アララギ』一九一六年二月号から四月号に「土岐哀果編萬葉短歌全集に就て」を連載、誤りを具体的に指摘した。編集上の誤りのほか誤植は何百とあると厳しい口調ながら、説得力のあるものであった(冷水一九八五、三〇七―三三三頁)。

自選歌集『空を仰ぐ』(一九二五)の「編纂小記」で、善麿は一九一八年八月に読売新聞社を辞めたことに触れ、そのとき「つかれた心身をしばらく静養しつつ、かつて着手した萬葉集の作者別編纂に最後の整理を加へる機会を得た(二六頁)」と述べて、その成果が一九二二年九月に出版された『作者別萬葉全集』であると説明している。長歌や旋頭歌なども含めた全作品

を取め、短歌については前著への古泉千樫の指摘を反映して修正した。失職してこの作業に専念した数か月、善磨は「もっと労働の中に飛び込んでゆくべきではないかと考え」「労働者に安く、栄養のあるパンを供給」する「市井のパン屋になろう」「冷水一九七四、一三三頁」と真剣に考えたというのだが、『萬葉集』の整理を終えた一九一八年十月に朝日新聞社に入社して、再び記者となった。遡って一九一六年九月の歌集『雑音の中』から善磨は短歌の三行書きをやめ、次の一九一八年十一月の『緑の地平』を最後に、それまでトルストイの翻訳『隠遁』（一九一三）や、ローマ字による編著などでも用いて、人々に親しまれた筆名「哀果」を使うのをやめ、同時に作歌もやめた。

『作者別萬葉全集』の編纂作業は、このような善磨の個人的な転機を賭けて行われた。

この本は版を重ね、一九二八年六月には同じ出版社アルスから新しい装丁で上・下二分冊の「普及版」が、さらに一九三一年六月には改造文庫版（第一〇一篇）が刊行されている。

この本には姉妹編の『作者別萬葉以後』（一九二六年十二月アルス／一九三二年七月改造文庫第一〇二篇）があり、『古今和歌集』以降の勅撰集から選んだ主な歌人、後に評伝を書く源実朝、京極為兼を含む二三名の作品を、年代順に並べている。この人選等について善磨は二歳年下の積道空こと国文学者、折口信夫に相談し、その教えにしたがった。一九二六年版の巻末には、折口による「短歌本質成立の時代―萬葉集以後の歌風の

見わたし」と題した五〇頁にわたる文章が掲げられ、「この一篇は、わが土岐善磨さんにさしあげる。この清い勤しみを以て、善いなからひのよろこびをしるす為に」との献辞が添えられている。『玉葉集』『風雅集』を萬葉調として高く評価する折口信夫の見解を、善磨は引き継いだ。テキストは『国歌大観』によった。自分にとって便利なものを作りたい一心で専門家の指導を仰いで作ったという姿勢は、前著と変わらない。一九二六年版には「上」とあって、続く下巻は近代以降のものだと予告されていたがそれは成らず、一九三二年版では「上」の文字が消えた。

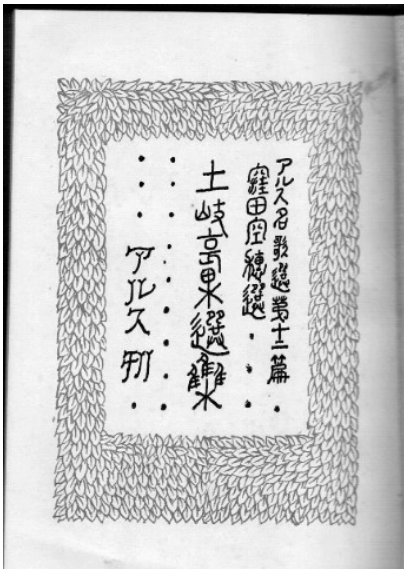
佐佐木信綱も折口信夫も『萬葉集』の研究者である。善磨は彼らの影響を受けて、『萬葉集』への理解と敬意を深め、萬葉調中心の和歌史観を描いていった。それは善磨が目指した自然主義、生活派の短歌観に矛盾なくつながるものであった。

もう一人、善磨が生涯、敬愛の念を持ち続けた窪田空穂（一八七七―一九六七）に触れておかなければならない。窪田も『萬葉集』の研究者であった。善磨は少年のころ窪田空穂の『まひる野』（一九〇五）を読み、「その若々しさ、活々しさ、その鮮やかさ、青春のあくがれ、人生のさびしさ、現実のちから強さ」に感動して「初めて純真なりつクとして、歌といふもの、真価を身に染みてあぢはふことができた」（土岐一九二三、四―五頁）。そして『作者別萬葉短歌全集』を作る際にも、その年二月に刊行されたばかりの窪田空穂の『萬葉集選』を「すぐれた理解を示してある」（土岐一九一五、二三頁）と思った。

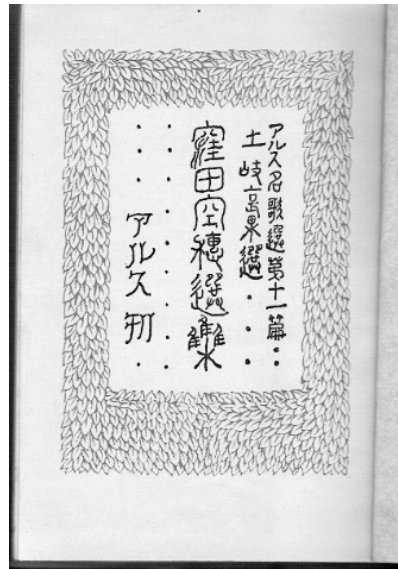
出版社アルスの粋な企画で、窪田空穂と土岐哀果は相互に選をして一九二三年八月、同時に『窪田空穂選集』と『土岐哀果選集』を出し、互いに「序文」を書きあっている。善磨は窪田の妻を亡くしたときの長歌等を紹介し「情念の純真さ」「用語の自由さ」「愛の深さ」「感情の強さ」「こまやかさ」について「萬葉人にまさるとも劣らない」と書いた。善磨の短歌の理想が萬葉であることがここにも示されている。空穂は善磨に柔らかく短歌の再開を促した。空穂四五歳、善磨三八歳。彼らの暮らす東京が大震災に襲われ、善磨が自宅を焼失する直前のことであつた。¹⁰⁾

三 柿本人麿の肖像画との出会いと田安宗武研究

善磨は「みづから整理した萬葉によつて、そこに年処を絶するリリックの強さ、伝統のちから、人間性のなつかしさをあちはひ知つたことは、感謝しなければならぬ。(『空を仰ぐ』(一九二五)「編纂小記」)と書くように、『作者別萬葉全集』の編纂作業を通して、『萬葉集』への親しみと信頼を確実にした。随筆集『柚子の種』(一九二九)には、『萬葉集の一部分』と題された随筆がある(二一七―一三四頁)。「作者別萬葉全集』をとつて、まづ帝王のところを抜いてみる。」という書き出しで、雄略天皇の作風の考察にはじまり、柿本人麿と山部赤人の作風の比較、続いて、山上憶良と大伴家持、それぞれの作品を並べてその人となりを想像しながら鑑賞している。自分が欲しかつ



『土岐哀果選集(窪田空穂選)』(1923
アルス)の扉(河路蔵)



『窪田空穂選集(土岐哀果選)』(1923
アルス)の扉(河路蔵)

た本を作った善磨が、それを活用して楽しんでるようである。こうして、『萬葉集』に造詣深い歌人と目されるようになる。『萬葉集』に關して書いたり語ったりする機会が増えた。

一九三二年刊行の隨筆集『文芸遊狂』に「柿本人麿像に就て」という隨筆がある（二五三—二五九頁）。萬葉歌人で「歌聖」として崇められた柿本人麿の肖像画を見た感動をつづつたものだが、この絵を描かせたのは田安宗武である。古代の有職故実に照らして正しい人麿像をと藤原千春に描かせた。善磨が見たのは、それと同じものを宗武の死後、息子の定延が同じ藤原千春に描かせたものだと紹介している。佐佐木信綱の所持品であった。人麿像といえば、平安時代から歌会にこれを掲げて歌道への精進を誓う人麿影供という宗教めいたしきたりがあった。『萬葉集』に夢中になった善磨が、後に学士院賞と博士号を受けることになる田安宗武研究を始めたきっかけは、この人麿像であったかもしれない。

八代將軍吉宗の次男にして『萬葉集』を重んじる学究肌の歌人、田安宗武への関心を深めた善磨が次に取り組んだのは、宗武が荷田在満かだのありまろに書かせた「国歌八論」であった。『萬葉集』を尊重する宗武が、共感する荷田春満かだのあすまろの養子である在満に、『萬葉集』を理想とする歌論を書くことを期待したところ、在満は、和歌はことばの「連続の機巧なるを喜び」「詞花言葉を翫ぶ」もので、その極まりは『新古今和歌集』であるとの考えを開陳し、意見のあわないところが多かった。そこで、宗武は反論と

して「国歌八論余言」を書き、在満が「国歌八論再論」で再反論、宗武が加勢を求めた賀茂真淵が「国歌八論余言拾遺」「国歌論臆説」を書く、宗武が「臆説刺言」を書く、という具合に三者が歌論を展開していった。善磨は、その一連を一冊にまとめて編著『国歌八論』とし、一九三二年七月に改正文庫の第一八六篇として刊行したのである。このころから善磨は田安宗武についての研究に夢中になっていった。このあと、宗武に關する著作を次々に世に問うていく。刊行の年代順に書名を挙げると、『田安宗武の天降言』（一九四〇）、『田安宗武 第一冊』（一九四二）、『田安宗武 第二冊』（一九四三）、『増訂 国歌八論』（一九四三）、『田安宗武歌集』（一九四四）、『田安宗武 第三冊』（一九四五）、『田安宗武 第四冊』（一九四六）、そして橘曙覧たちばな のあけみと合わせた『宗武・曙覧歌集』（一九五〇）となる。

戦中戦後の一九四〇年代にたゆむことなく進められた田安宗武研究こそは、善磨が戦争による混乱の中、大日本歌人協会解散事件（註）で辛酸を舐め、空襲で家財もろとも東京の家屋を焼失し、疎開して農業を手伝った後、戦後焼跡のバラックから生活をたてなおすという困難にも怯むことなく書き継いだテーマであり、善磨と『萬葉集』との深いかわりを示すものである。

『田安宗武 第三冊』は、空襲で原稿も校正刷りも焼けたが、印刷所で印刷のあがったものが奇跡的に残り、これをもとに焦土の中で出版された。最後に「口絵の人麿画像に就て」と題された文章があり、先に紹介した肖像画を口絵として載せたこと

が知られる。「この画幅一軸は、佐佐木信綱博士愛蔵のものであつたが、先年、著者が宗武研究に着手した当時、博士から著者に対し、記念として、惠贈を忝うしたもので、現在常に斜面荘〔善磨の目黒の自宅〕の壁間に掲げ、そのもとにおいて『田安宗武』の稿をつづけてゐるのである（五二〇頁）」と書かれてゐる。しかし、この本にはその口絵がない。

善磨の戦後二冊目の歌集『夏草』（一九四六）に収められた随筆「東野荘茶話」では、奇跡的に残つた印刷原稿のうち口絵だけは焼失したこと、そればかりか、自宅に掲げていた人磨像の画幅も焼失してしまつたことが説明されている。「佐佐木信綱博士の恩頼を空しくし僕の殆ど唯一の貴重な蔵幅を失つた」ことは「取り返しつかないこと（九七頁）」だと、その落胆のほどが偲ばれる。

四 土岐善磨の短歌における『萬葉集』の影響

こうして『萬葉集』との縁の深まつた善磨だが、短歌の実作において『萬葉集』の影響はどうだったのだろうか。窪田空穂（一九三三）は、『作者別萬葉短歌全集』を出した後の『雑音の中』（一九二六）と『緑の地平』（一九一八）が、それまでの歌集とは違って「自己を主とし、自己のうちに環境を統一しようとし」、「落ち着き」「安らかさ」「静かさ」「広さ」があり、「古くして同時に新しい、平凡に似て同時に味ひの尽きない」「新しい世界」になつてゐると述べている（二七頁）。

松村英一（一九五七）は、善磨の歌風が大正後期に変化したと指摘、「一口に言えば万葉調になつたということである。（…）純粹な自然観照の歌が見られる点で、世界の広くなつたことが思われる。万葉に親しんだのが歌風変化の直接原因であろう（二八五頁）」と、『作者別萬葉全集』を編んだ影響に触れている。この指摘は先にあげた空穂の批評とも符合する。大正後期の土岐哀果の作品に作風の変化は確かに認められる。

しみじみと吸はるるときあしのうらこの朝の春の泥をわが踏む。
〔雑音の中〕

かへり来て子らのかしらに手をおきつ、正しき父はいとも術なし。
〔緑の地平〕

加齢による歌境の変化もあるものと思われるが、時間をかけて『萬葉集』を読み込んだ影響はあつたに違いない。詩形への本質的な信頼は揺るぎのないものになつてゐる。

善磨は空穂との選集の選び合いを通して「ひさしく歌をつくらないでゐたことが寂しくなつた。（…）わたくしはまた歌をつくらう（土岐一九三三、一五頁）」と述べ、このあと作歌を再開した。一九三三年の『新歌集作品Ⅰ』では自由律に挑戦し、ゆくべきところに落ちた瞬間、はたりと球はとまる緑の一点（ゴルフ）

そつと寄りそつて腋のしたへ無言のピストルをさし向けさうな男の間を通る（ニューヨーク風景）

といった清新な作品を作つており、決して落ち着く一方ではな

かったが、松村の言う自然主義的な傾向はここでも首肯されるし、「新しい題材の探求と摂取」は、『萬葉集』を理想とする宗武が『国歌八論余言』で加えた「新しき物の名を歌によむの論」にも沿うものである。善麿の短歌の理想は『萬葉集』と定まった。

五 戦前戦中の土岐善麿と『萬葉集』

善麿が日本の上代文学を意識した短歌を作るのは、一九四〇年のことである。『萬葉集』と同じ奈良時代に完成した『古事記』の直接的な影響が、一九四〇年二月、善麿が「大日本歌人協会」常任理事としてその編纂の中心的役割を果たした『紀元二千六百年奉祝歌集』に寄せた次の一首に見られる。

みつみつしわれらが祖は撃つべきもの正しく知りて撃ちは
たしましき

同書の「大日本歌人協会」による「序」には、「恭しく惟ふに、神武天皇親しく皇帥を率ゐて東方の征途に就き給ひ、遂に大和の平野に国都を開き給ふに至る間、その聖詠の古記に伝へられたるものを拝し奉れば、和歌表現に於ける民族的伝統の久しき、悠遠高逸の感を深くせずんばならず（一頁）」とあり、一千数百名の会員に「おのおの会心の一首」を呼びかけて「国民情念の発するところ」を記念しようとしたと説明されている。署名はないが、この「序」の筆者は善麿であると三枝昂之（二〇二二）は断定している（八三頁）。善麿は、この「序」を体现する「会

心の一首」としてこの作品を寄せたのだった。

「みつみつし」は「久米」にかかる枕詞で、『古事記』に「みつみつし久米の子らが垣下に植ゑし椒口疼く我は忘れじ撃ちてしやまむ」ほか、同じ結句を持つ作品が複数ある。「撃ちてしやまむ」は戦争中、戦意高揚のために盛んに使われたフレーズであった。このフレーズを本歌としつつ、「われらが（神代の）祖先は撃つべき敵を正しく見極めて撃ち果たしたのだ。（我々も正しく敵を撃ち果たそう。）」と善麿は詠んだのである。

一九四二年の歌集『周辺』（日本評論社）の「紀元頌」と題された一連も『古事記』の旋頭歌、伊須氣余理比賣と大久米命との問答「あめつつ ちどりましとと などさけるとめ／おとめに ただにあはむと わがさけるとめ」に基づく「おほきみの神のみ国のいやさかに直に逢はむとわれもさける利目」などで構成されている。神武天皇以来の「紀元」を考えると、善麿の頭に浮かぶのは『古事記』の歌謡であったようだが、それは戦争中、『萬葉集』を国民精神の統合とする風潮に同調していた善麿にとって、『萬葉集』にもつながるものであったにちがいない。

戦争中に没頭して書き上げた『田安宗武』の中で、善麿は『萬葉集』とのかかわりを繰り返し述べている。『田安宗武 第一冊』（一九四二）の「自序」には

顧みれば、僕が萬葉集に近づかうとする欲求に迫られて、

まづその作者別編纂を試みたのは大正四年のことであつた。
〔…〕それらの編纂の仕事が、この『田安宗武』の覚書き
作成に資益したことは、みづから認めざるをえないことであ
る。(三頁)

とある。この「自序」によると、宗武の歌集『天降言』を初め
て公にしたのは佐佐木信綱で、続日本歌学全書に『近世名家家
集』の一部として挙げたのだという。公刊に先立つて正岡子規
に見せたところ子規が一八九九年の秋に、

田安宗武の天降言といふを見て吾はいたく驚きたり。彼は
萬葉の趣味を解するに似たり。彼は教を真淵に受けたけれ
ども其歌の趣味を取ることとは之れを真淵よりせずして直に
萬葉よりせるならん。真淵は萬葉萬葉といひて教へしなる
べきも真淵自身には十分に会得せざりし萬葉の趣味を却て
宗武によりて会得せられたるも面白し。

と書いたという(土岐一九四二、六頁)。「田安宗武 第一冊」
には、『天降言』の全作品の評釈と『国家八論』の議論の全文
と解説が取められている。巻末の「解説」の最後は、

上下一千年を貫く萬葉精神は、脈々として歌の世界に具顕
せられる。われわれの歌の世界は、まさしくそれを具顕す

るものでなければならぬ。そのひとつの大きな指標とし
て、田安宗武を有することをわれわれの誇ともし、また力
ともして、更に、その新しい理解を深めるために、いささ
か歌の方面を主として宗武の全貌を窺つてみようとしたこ
とは、決して徒爾でなかつたと信じるのである。

と、善麿の宗武研究が「萬葉精神」の探求に動機づけられてい
ることを述べる文章で納められている。戦争中の著作である第
一冊(一九四二)・第二冊(一九四三)・第三冊(一九四五)の
「自序」には長男の出征、娘二人の夫の出征が順次報告され、
宗武研究が「銃後」の仕事であることが語られる。それは「萬
葉精神」の追求でなければならなかつた。第三冊では宗武の『古
事記』研究、古代研究をまとめた。

善麿が戦争中に研究に没頭できたのは、当時、国家的に称揚
されていた『萬葉集』にかかわる仕事の一環であつたからであ
る。ほかに、『源実朝(青少年日本文学)』(一九四四)の最
後に、善麿は実朝の「天の下八隅のなかにひとります島の大君
萬代までに」を引用して、「八隅」が萬葉時代の言葉であるこ
とを説明し、

大八洲の隅々にゆきわたつてただひとりおはします大君、
このあきつしまを続べしらしたまふ天皇は、千秋萬代、聖
寿無窮、宝祚無疆、その大御稜威のもとに、萬民はおのお

のその職域に就いて忠誠を捧げるといふ歌である。

と解釈し、さらに、「実朝が尊皇の念を表明したこの傑作一首を最後に掲げて、諸君のためのこの一冊のページを閉ぢることとし、その前にもう一度、次の歌を吟じよう」として最後に一首、「山は裂け海はあせなむ世なりとも君にふたごころわがあらめやも」を掲げた。実朝について、善磨は『短歌研究』一九四五年一月号に「実朝（随筆的作品）」として短い戯曲も寄せている。戦争中の善磨は、『萬葉集』に依ることによって、自らの精神的充足を図りつつ、戦時の「国民精神」に、あたかも自然に寄り添っていったかのようである。

しかし、戦争が終わっても対象への関心は変わらなかった。戦争中の短い戯曲から発展させて、一九五〇年の『短歌研究』十月号に、善磨は「新才能 実朝」を発表している。

六 『新萬葉集』、また戦時のアンソロジーの審査員・ 編者としての善磨

善磨の『萬葉集』による国民精神の統合への同調を加速させた事柄として、『新萬葉集』全一一巻（一九三七—一九三九）の審査、編集に尽力したことも見過ごせない。

『新萬葉集』事業は規模の大きさ、層の厚さ、質の高さにおいて瞠目に値する。民間の出版社である改造社の社長、山本実彦が企画し、編集事務担当に歌人の大悟法利雄を据えて、審査

員には、善磨のほか、北原白秋、前田夕暮、斎藤茂吉、太田水穂、窪田空穂、佐佐木信綱、釈道空、与謝野晶子、尾上柴舟と、指導的立場にある歌人、一〇名を揃えた。最年少の釈道空が五一歳、最年長の佐佐木信綱が六六歳、善磨は五三歳であった。初顔合わせは一九三七年三月である。「国家総動員法」が施行されるのは翌一九三八年だが、『新萬葉集』事業はそれに先立って歌人たちを「総動員」するかのように全国に協力を呼びかけた。一般公募は一人二〇首以内。別に全国の歌人たちには「勧誘状」で五〇首以内を募集した。締切りは五月末。「満洲」や中国、台湾、朝鮮、樺太、欧米からの応募もあった。二十首組一七〇五〇人余り、歌の数にして約三五〇〇〇〇首。「勧誘状」による応募は五七四人、二八七〇〇首。合わせて「約四十万首」について審査員は急ピッチで選歌作業を進めた（荻野泰茂一九七二）。

善磨の選定基準は「内容と表現における『真実』であった。真実は胸を打つ。〔∴〕それは、必ずしも『新萬葉集』のみに限られる標準ではもとよりない。いやしくも萬葉、記紀以後、あらゆる時代の短歌に要求される標準であり。〔∴〕明治における短歌革新の第一要諦であったと信じる（一九三七年十月付「審査の間・審査の後」、土岐一九七五、五一—五二頁）」とあり、ここにも善磨の萬葉観がうかがえる。と同時に、国民が一九三七年の統合の渦の中心であったと言え、善磨はその中に自らを同化して

いったようである。

膨大な手書きの原稿を読む負担が白秋の眼疾の原因になったのではないかと言われる苛烈な作業であったが、「わが短歌史上これだけ画期的な事業にたずさわり得る以上、審査という仕事の内容と本質について、僕は僕の全力を挙げてみよう」と覚悟を決めて臨んだ善磨はその責任を全うした。それは誰も同じであったとみえ、計画は短期間のうちに実現する。一九三七年十二月に「宮廷篇」が「別巻」として先に刊行され、翌一九三八年には作者の五十音順の九分冊が、一月に巻一、二月に巻二と毎月順に発行され、九月に完成した。そのあと、一九三九年六月に「補遺」が明治初期の作品等を集めて構成され、分厚い全一巻が揃ったのである。関係者一同、歴史に残る快挙と信じたに違いない。

公募作品の締め切りは五月末日で、そのあと七月に盧溝橋事件が起きて日中戦争（支那事変）が勃発する。『新萬葉集』には、戦争による緊張の高まる前の平時の生活から生まれた人間味あふれる作品が多く選ばれている。善磨の五〇首は第五巻に掲載された。

『新萬葉集』に含まれない日中戦争勃発後の新たな局面を詠んだ作品を、善磨は小型の歌集『近詠 土岐善磨新歌集作品2』（アオイ書房）に込め、各社社に「出征会員に送って欲しい」と謹呈した。中でも出征歌人の多い「アララギ」へは百部を寄贈、掌サイズのこの歌集は戦場の歌人たちに届いた。その中に、

新萬葉集の審査のあひだに北支より中支にわたりてわが軍
勝ちたり

という作品が見える。審査の途中で日中戦争が全面化し、多くの若者が中国の戦地に駆り出されたのだった。残された家族も戦争や銃後の生活を歌に詠むようになる。

善磨は自らが理事を務める大日本歌人協会で『支那事変歌集』の「戦地編」「銃後編」を企画した。まず、一九三七年七月の「支那事変」勃発から三八年十月までに新聞雑誌に発表された戦地からの作品を集めたところ、三〇〇〇首以上に及んだ。その中から五〇〇名による二七〇四首を選んで一冊にまとめたのが『支那事変歌集 戦地編』で、この年十二月に発行された。一九四〇年二月には先に述べた『紀元二千六百年奉祝記念歌集』、そして一九四一年十月には『支那事変歌集 銃後篇』と、善磨は国民精神統合のアンソロジー編集に追われたのである。この過程においても、善磨の心の中で『萬葉集』につながる意識は絶えることがなかった。それがどれだけ善磨の気持ちを感じたか分からない。

七 敗戦後の土岐善磨と『萬葉集』

一九四五年八月十五日、善磨は疎開先である埼玉県三保村で玉音放送を聞いた。六月に疎開してから短歌を再開、『秋晴』（一九四五）は敗戦前後四か月ほどの作品で構成した。

いかに戦ひいかに勝ちいかに敗れしか慄然としてはじめ
知りぬ (『秋晴』)

善磨は考え続け、『夏草』(一九四六)『冬風』(一九四七)『春野』
(一九四九)と続けて歌集を刊行した。

このいくさをいかなるものと思ひ知らず勝ちよろこびき半
年があひだ (『夏草』)

敗戦のショックの中で、善磨の心を去らなかつたのが『萬葉集』
であった。『夏草』に取めた随筆「斜面復興」に、『萬葉集』に
触れた個所がある。

〔住居や実家の焼跡の〕善後処置も容易なことではなかつ
たが、そのあひだにも何とか心の落ち着きを得ようと、僕
は強ひても書齋にすわり、これが日本の文化的遺産であり
萬世不朽の国宝的古典だとおもつて、この際ひとつ萬葉集
を第一巻から読み返してみようと窪田空穂氏の新しい評釈
を改めて披いてみたのだが、どうしてもあたまにはいらい
ない。傑作秀歌といはれるものに対しても、一体こんなノ
ンキなもの為何の役にたつのかといふやうな気がして、鑑賞
どころではなかつた。

というのである。しかし、このあと森鷗外の『阿部一族』を読

み始めたら引き込まれ、「文学の究極するところはそこに在る
—さう僕は思ひ到つて、あらためて鷗外の文学の偉大さに頭を
さげると同時に、また不思議に、それからは萬葉集も読み続け
られた」という。こうして、善磨は戦後の焼け跡で『萬葉集』
を再確認した。一九四五年十二月、目黒の自宅の焼跡に田舎家
風の家が何とか建った。善磨の執筆活動は止まることなく、こ
の暮らしぶりを、善磨は「清忙」と呼んだ。そんな状況で『萬
葉集』の軽妙な作品が心に浮かんた。『萬葉集』巻十六、大伴
家持の「瘦せたる人を嗤咲へる歌二首」の「瘦す瘦すも生けら
ばあらむをはたやはた鰻を捕ると川に流るな」(三八五四)で
ある。善磨はこれを受けて、

瘦す瘦すも生けらばあらむ時なれと萬葉びともむなぎをく
ひき (『夏草』)

と詠み、鰻を食べたようである。

このころ、善磨は窪田空穂を訪問している。

書けるだけは書いておかむと萬葉集評釈の筆けふも執りい
ます (『夏草』)

空穂も『萬葉集』に向き合っていた。

この時期、ジャーナリズムでは戦後の新時代に短歌はふさわ
しくないとする短歌否定論が唱えられたが、善磨は一九四七年
三月の文章に「歌人はまっぱだかになって、〔…〕毅然として、

浩然として、この社会の前に立つてみることである。そうしても恥かしくないだけの肉体の所有者、精神の所有者だけが、この歌の「危険突破」を担当し得るであろう。(一九四七年三月付の「結社解消論」、土岐一九七五・二五〇―一五二頁)と書いて、揺らぐところがなかった。

日本評論社の編集者の機転によって原稿が焼けずすんだ『田安宗武 第四冊』が、一九四六年八月に刊行され、その「自序」に善麿は「今やわれわれは、多年にわたる軍国主義の日本から、新しい自由主義の日本へ、平和の日本へ、文化の日本へ、多難にして而も多望な解放と建設の発程に立つたのである。」と綴った。長男は復員したが、娘二人の夫はまだ帰らないと書いている。娘婿の一人はついに帰らなかった。翌一九四七年、『田安宗武』全四冊の研究業績によって帝国学士院賞が授与されたのは善麿の望外の喜びであった。

善麿の出版活動は順調で、一九四七年十月には評伝『京極為兼』が刊行された。その「自序」には「小著を成すに至つた主なる理由」として十の項目を挙げている。内容を要約すると、その一は「萬葉集の現代への展開について様々な角度から考察することが必要である」、その二は「萬葉集の展開において、玉葉風雅の時代は重要である」、その三に「玉葉風雅を撰進させたのは伏見上皇で、具顕宣揚に努めたのは京極為兼である」そして、為兼の理念と作品は旧弊を対破し、玉葉風雅は清新明暢な日本の美的世界を表現しており、「八、著者にとつては、

田安宗武研究との連関において、萬葉・新古今・玉葉風雅一系列の中に、為兼について考察する必要がある」ということである。善麿は、「萬葉―新古今―釈教歌―実朝―為兼―玉葉風雅―宗武―現代」(二〇〇頁)と書いて、「古典の研究はかくして現代の、現代としての意義を持つ」と書いた。巻末には「為兼は清らかな日本の国土自然と共に在り、澄高なる日本人の心性感と共に在る。この国土この自然この神聖この感情の尊い所以を体認せしめるうへに、歌人としての為兼の存在はまた一つの国民的志向を顕示するものといひ得ると思ふのである。」と戦後の自らを励ますような文章が見える。

為兼研究はその後も続き、関連の著作は『新修京極為兼』(一九六八年 角川書店)、『京極為兼(日本詩人選15)』(一九七一年 筑摩書房)と最晩年にまで及んでいる。

田安宗武の研究で早稲田大学より博士号を授与された善麿は、一九四七年、六二歳の年から窪田空穂の後を受けて早稲田大学と同大学院で上代文学の講義を担当した。『萬葉集』の講義を受講した岩田正の回想によると、善麿は初めに「大胆に独創的に、その意義を現代的に追究してゆく」というようなことを明るいはりのある声で語りかけ、窪田空穂の『萬葉集評釈』(一九四三―一九五二)を傍らに置き、これを尊重しながら『萬葉集』を読み解いていったという(岩田一九四八、八六頁)。六六歳の年に東京都立日比谷図書館長の仕事に加わった。そして、一九五五年七〇歳を機に、それらの職を退いた。

上代文学を講じる中で深められた善麿の「萬葉人」を含む古
代の人々への心寄せは、このあと、さらに自由な境地に至る。
取り組んだのは、『古事記』『日本書紀』等に描かれた人物をめ
ぐる短歌の連作であった。歌集『歴史の中の生活者』(一九五八)
には、やましたるのどと日本武尊の事跡を描いた「倭建抄」、雄略天皇をめぐる
人間模様を描いた「大長谷抄」、おおあまのみこ大海人皇子を主人公に壬申の
乱前後を描いた「大海人抄」を収めた。その人物になりかわっ
て五〇首ほどの連作を構成するという、短歌による独白劇のよ
うなつくりである。善麿は巻末の「歴史の中の生活者」その叙
事詩的抒情の方法について「と題した解説に、「短歌の現在に
おける低迷」をどうするか、という問いに発する「試み」であ
ると述べている。似た試みは、たかはらのあけみ橘曙覧にもあると書いているの
をみると、善麿が取り組んでいた『萬葉集』から現代への系譜
が意識されている。

続いて出された歌集『相聞抄』(一九五九)は、木梨の軽の
太子と軽の女郎女との悲恋を太子の立場から描き、『額田抄』
(一九六〇)には、女性の額田王になりきって作った四六首に
よる「額田抄」が収められている。善麿は、フィクション仕立
ての「付記」にこの作品群は新しく発見されたものだとき、額
田王じしんのものでないにしても、その身辺、ないし心境に同
情したものが、あるいは彼女に代わって、こうした作品を残した
ものかとも解される」と楽しそうに書いている。

庭の梅ほころびそめつ おのづから成りしままなる歌集
『相聞抄』 (額田抄)

という作品を見ても、これらは老境にある善麿からあふれ出て
きたようである。一九六四年の歌集『若葉抄』には新作能「鑑
真相上」も収められている。

一九五五年に鈴木三重吉『古事記物語』が角川文庫になつて
版を重ね、アニメーション作家、大藤信郎は一九五五年から
五九年にかけて『古事記』に因んだ作品を五作続けて発表する
など、この時期、記紀に心を寄せたのは善麿だけではない。神
話を含む記紀の説話は、戦後七年におよぶ占領期には憚られた。
ようやく日本が独立したとき、成長期に記紀の説話に慣れ親し
んだ世代の胸に、その世界が生き生きと蘇ってきたのかもしれ
ない。

さて、そうして上代文学と戯れるような日々を送っていた善
麿は、一九六五年、八〇歳の年に武蔵野女子大学に日本文学科
が開設されるにしたがって依頼を受けて主任教授に就任し、
一九七九年、九三歳で退くまで週に一度、教壇に立ち続けた。
随筆を除く善麿の最後の単著は九一歳の年に刊行された阿倍
仲麻呂研究『天の原ふりさけ見れば』(一九七六)で、やはり
上代の人物に心を寄せたものであった。ここでも、冒頭に仲麻
呂に成り代わった二一首による「望郷古逸抄」が「序に代えて」
としておかれている。「あとがき」に善麿は、これを「老境懐

古のすさび」また「日中文化交流の小さなモニメント」と呼んでいる。善磨は早くから漢詩に親しみその現代日本語訳にもとりこんできた。一九五六年に日本中国文化交流協会が創立されると理事となり後には顧問となつて、日中国交正常化の後是最初の訪中団「日本文化界代表団」の団長として、三度にわたつて中国を訪れもした。そうしたいいくつかの川が、海にいたつてひとつになるようにまとまつた最後の著作であつた。

八 おわりに

本稿では、善磨と『萬葉集』との関係について、善磨の個人史をたどることに主眼をおいた。『萬葉集』に特に関心のなかつた青年歌人、土岐哀果は、神経衰弱の治療のために『作者別萬葉全集』に取り掛かりその過程で『萬葉集』の研究者である歌人の佐佐木信綱、窪田空穂、折口信夫と交わつて影響を受け、自ら『萬葉集』の魅力に目覚めて学究肌の歌人、土岐善磨に生まれ変わったのだつた。完成の後、善磨は『萬葉集』後の「萬葉調」の短歌の歴史を探求し、『萬葉集』の流れを汲む歌人として注目した源実朝、京極為兼、田安宗武、橘曙覧の評伝を書き、特に田安宗武についてはその研究に没頭する中で敗戦を迎えた。戦後、この研究によつて博士号を受けた善磨は、その後、大学の教壇で上代文学を講じ、萬葉時代の人々に思いをめぐらしながら、最晩年まで現役であり続けた。三〇歳の『萬葉集』との出会いが決定づけたその後の六〇年余、戦中戦後の混乱を

も『萬葉集』への信頼を軸に揺らぐことなく九五五年を生き切つた人生であつた。

善磨と『萬葉集』において戦争とのかかわりを考えると、善磨は『萬葉集』が戦時の国民精神の統一の象徴としての役割を帯びたとき、大日本歌人協会の理事としてその旗振り役を務めた一人であつた。しかし、『萬葉集』の作品や、その関連で引き出された上代歌謡や源実朝、京極為兼、田安宗武、橘曙覧への関心は、戦時の目的の潰えた戦後も変わることなく深化していった。戦争への協力こそ、善磨にとって本質的なものではなかつたとはいへ、戦時に決定づけられた『萬葉集』に日本の国民精神の本質や短歌という詩形への信頼の根柢を求めようとする思いは、生涯にわたつて善磨を支え続けたように思われる。『萬葉集』について、善磨は様々なメディアに随筆を寄せる機会も多く、夥しい数の随筆を書いた。単著だけで二〇点ほどに及ぶ随筆集中にそれは散在している。それらを読み解いて、善磨の『萬葉集』の読みや萬葉歌人観、また「萬葉調」の捉え方について考えることは可能であろうと思われる。今後の課題である。

また、善磨の活動が、善磨の生きた時代、特に戦争の時代における『萬葉集』の受容の事情とどう関係していたかについて、また、近現代の短歌史への位置づけについての検討も、今後改めてとりくむ必要がある。

馬場あき子は、善磨の新作能について論じる文脈で、一般に進歩的な人は伝統を尊重することに欠け、伝統を尊重する人は

進歩的思想に欠けるが「土岐さんには進歩的な思想と日本の伝統を尊重する思想が共存していた(…)土岐さんにおいてのみ、これが二つとも可能だった(馬場二〇〇二、一八九—一九〇頁)」と語っている。これは、善磨の本質を言い当てているように思われる。本稿は、『萬葉集』を軸として善磨の特に上代文学への敬愛の深さを論じた。その傍らにある「進歩的な思想」について、たとえば善磨は『萬葉集』をローマ字にしたいと志し、生涯にわたってローマ字推進論者であり続けたこと、エスペランチストでもあり、海外の文学、翻訳に深い関心を寄せていたことについては、稿を改めて考えたいと思う。

注

(1) 冷水(一九八五)は橋本徳寿、岡野直七郎、大岡博が『萬葉集』に触れた最初の書物としてこれを挙げて一般的に引用している。当時は類書もなく、手軽に読めるものとして一般に迎えられた。ただし、一九三二年五月に澤瀉久孝・森本治吉による「萬葉歌人系譜」二枚付きの『作者類別年代順 萬葉集』が出てからは、より信頼性の高いものとして特に研究者はこちらを参照したという(小松靖彦氏のご教示による)。森本による「自序」には、一九二七年七月末に、ふと思いついて「萬葉の作者別のごく正確なものを出して久松(潜一)先生へ借金をおかへししようではないか」と妻に言ったのが、「本書編纂の動機」であると書かれている。善磨の名も書名も書かれていないが、『作者別萬葉全集』

に刺激されて編まれたことを示すものと思われる。

(2) 掲出歌は「遠くから買いに来たのだからおまけをしてくれないのに」とパン屋の娘に不満を漏らしている。このような、実は多くの人がふと思っても言わずにおく「はしたなさ」を吐露するような作品は、伝統的な和歌と一線を画する『NAKIWARAI』の特色の一つだと思われる。

(3) 許可を得て売った父の蔵書の中に『萬葉集』が含まれていた。「古本屋は『萬葉集などはスタリモノです』といつて、ウンと安く持っていた」という(土岐一九一五、二二頁)。

(4) 小川(二〇一二)によると、一九一五年までに『萬葉集』の評釈は一八九二年の畠山健『萬葉集釈義』以来、正岡子規、長井金風、森田義郎、伊藤左千夫、千勝義重、井上頼文らによるものが公刊されていた。佐佐木信綱の『萬葉集選釈』(一九一六)、折口信夫『口訳萬葉集』(一九二七)は善磨の『作者別萬葉短歌全集』直後の刊行である。善磨の「思い付き」はこの時期の『萬葉集』への関心の高まりと同期していたようである。

(5) ローマ字運動家でもあった土岐哀果は、『萬葉集』をローマ字書きにしたいと考えていた。しかし佐佐木信綱に相談して、プフィッツマイヤーやデイキンズの萬葉研究にも接し、その困難を知って断念した(土岐一九一五、二四頁)。

(6) 『作者別萬葉短歌全集』の巻末に、佐佐木信綱が「鹿持雅澄小伝」を寄稿している。鹿持雅澄(一七九一—一八五八)は、長期にわたって『古義』を書き上げたが、生前には上梓されず、

維新後、一八七九年になって宮内庁より公刊された。江戸時代末の著作が、明治の青年、善磨には同時代性をもっていたことを思うと、改めて善磨の仕事の新鮮さが思われる。

(7) 佐佐木信綱は『萬葉集選釈』(一九一六 明治書院)、『校本萬葉集』(一九二五 校本萬葉集刊行会)等の『萬葉集』研究で知られる。ただし、善磨が相談した時点では、これらは刊行されていないかった。

(8) 『作者別萬葉短歌全集』の巻末には「近刊予告」として「土岐哀果編著 萬葉長歌全集 附 萬葉作者小伝、起句索引」と書かれているが、これは実現しなかった。

(9) 作歌を中断した一九一九年から一九二三年までの期間、善磨は石川啄木全集の編纂やローマ字による種々の編著に力を注いだ。自選歌集『土岐哀果集』(新潮社)を一九一七年に出したの
は、短歌に終止符を打つつもりだったのかもしれない。

(10) 関東大震災で、窪田空穂の自宅は焼失を免れたが、その悲惨な状況を写し取るように描いた連作が『鏡葉』(一九二六)に収められている。

(11) 一九四〇年六月、五五歳の善磨は朝日新聞社の定年退職記念に歌集『六月』を刊行した。ところが、この中の「遺棄死体数百といひ数千といふいのちをふたつもちしものなし」などが時局批判だとして糾弾され、太田水穂、吉植庄亮、齋藤澗が、大日本歌人協会の臨時会議で「一部の理事」が国家の非常時ににおける新体制に応じないことを理由に、協会の解散を要求した。

同年十一月六日、善磨は議長席で彼らの要求を受け入れ解散を決定した。これが「大日本歌人協会解散事件」で、これを機に善磨は戦時中の歌壇と距離をとるようになった。

(12) 「東野莊」は、善磨一家の疎開先、埼玉県三俣村の新井家の離れに善磨がつけた愛称。

(13) 土岐(一九四七)巻末の広告等によると『田安宗武』は全五巻の計画であった。本稿で紹介した第一冊「歌作歌論」、第三冊「古語要略」のほか第二冊は「古典論註」で、「伊勢物語註」「小倉百首童蒙訓」「徒然草評論」、第四冊は「諸著要略」で、「有職故実」などが収められた。第五冊は「国学余論」の予定であったが、実現されなかった。田安宗武の著作をまとめて論ずる書物は現在も善磨のもの以外には見当たらないようである。

(14) 『新萬葉集』は今日、顧みられることが少ない。二〇一七年十月末から十二月初めにかけて堺市の「さかい利晶の杜」において「万葉集の人間主義―不安な未来への希望を求めて―」と題した「新萬葉集」刊行八十周年記念展」が催されたのが、数少ない紹介例である。全一一巻には、明治から昭和の日中戦争前までのさまざまな人々の生活から生まれた作品が選ばれて結果としており、読み継ぐ価値は十分にある。

(15) 戦後早期の四季の名を冠した四歌集の収録歌数は合計九四三首。「春野」の「はしがき」に善磨は「混迷の秋から、期待の夏へ、反省の冬から、希望の春へ」と書いた。

参考文献

岩田正(一九四八)「教壇の土岐先生」『余情第七集 土岐善磨研究』

千日書房、八四―八六頁

小川靖彦(二〇二二)「願はくはわれ春風に身をなして―佐佐木信

綱の萬葉学における「評釈」〔『萬葉集選釈』と「新月」―〕『青

山学院大学文学部紀要』第五四号、一―一七頁

荻野恭茂(一九七二)『新萬葉集の成立に関する研究』私家版

澤瀉久孝・森本治吉(編)(一九三三)『作者類別年代順 萬葉集』

新潮社

河路由佳(二〇一七)(二〇一九)「土岐善磨を読む(一)〜(十二)」(隔

月刊行の短歌誌『新暦』二〇一七年一月号〜二〇一九年一月号

に連載) 新暦短歌会

河路由佳(二〇一九)(二〇二二)「土岐善磨の一九四〇年代(一)

〜(九)」(隔月刊行の短歌誌『新暦』二〇一九年三月号)

二〇二二年一月号。連載中) 新暦短歌会

河路由佳(二〇二〇)「新作能〈青衣女人〉の初演(一九四三)と

再演(一九四九)の間―土岐善磨の戦中戦後―」『武蔵野文学館

紀要』一〇号、一九―四〇頁

窪田空穂(一九〇五)『まひる野』鹿鳴社

窪田空穂(一九一五)『萬葉集選』日社

窪田空穂(一九二三)「序」『土岐哀果選集』アルス、一―三二頁

窪田空穂(一九二六)『鏡葉』紅玉堂書店

三枝昂之(二〇二二)『昭和短歌の精神史』角川ソフィア文庫

馬場あき子(二〇〇二)「新作能の作者」『武蔵野女子大学能楽資料

センター紀要』一四号、一八―二〇三頁

冷水茂太(一九七四)『土岐善磨の歌』光風社書店

冷水茂太(編)(一九八三)『土岐善磨(人物書誌体系5)』日外ア

ソシエーツ

冷水茂太(一九八五)『土岐善磨考/その哀果時代』青山館

松村英一(一九五七)『大正秀歌(日本秀歌八)』春秋社

山本三生(編纂代表)(一九三七)『新萬葉集 別巻(宮廷篇)』改造社

山本三生(編纂代表)(一九三八)『新萬葉集 第一巻―第九巻(本

編・五十音順)』改造社

山本三生(編纂代表)(一九三九)『新萬葉集 補巻(明治初期篇・

補遺)』改造社

【本稿にかかわる土岐善磨の著作一覧】

土岐哀果(一九一〇)『NAKIWARAI』ローマ字ひろめ会

土岐哀果(訳)(一九一三)『隠遁』(トルストイ原作)新陽社

土岐哀果(編)(一九一五)『作者別萬葉短歌全集』東雲堂書店

土岐哀果(一九一五)『編纂手記「萬葉短歌全集」』『生活と芸術』

第二巻第二二号(八月号) 東雲堂書店、二―二五頁

土岐哀果(一九一六)『雑音の中』東雲堂書店

土岐哀果(一九一七)『土岐哀果集』新潮社

土岐哀果(一九一八)『緑の地平』紅玉堂

土岐善磨(編)(一九二二)『作者別萬葉全集』アルス*一九三二年

に改造文庫版

土岐哀果（一九二三）「序」『窪田空穂選集』アルス、一一一六頁
土岐善磨（一九二五）「空を仰ぐ」改造社*一九二九年に改造文庫版
土岐善磨（編）（一九二六）『作者別萬葉以後』アルス*一九三二年
に改造文庫版

土岐善磨（編）（一九二八）『作者別萬葉全集』（上下巻）アルス*

二分冊にしたもの

土岐善磨（一九二九）「袖子の種」大阪屋号書店

土岐善磨（編）（一九三二）『国歌八論』改造社（改造文庫）

土岐善磨（一九三三）『新作品集Ⅰ』改造社

土岐善磨（一九三八）『土岐善磨新歌集作品2 近詠』アオイ書房

土岐善磨（一九四〇）「六月」八雲書林

土岐善磨（一九四〇）『田安宗武の天降言』日本放送協会

土岐善磨（一九四二）『田安宗武 第一冊』日本評論社

土岐善磨（一九四二）『周辺』日本評論社

土岐善磨（一九四三）『田安宗武 第二冊』日本評論社

土岐善磨（編）（一九四三）『増訂 国歌八論』改造社（改造文庫）

土岐善磨（一九四四）『源実朝（青少年日本文学）』至文堂

土岐善磨（一九四四）『田安宗武歌集』書物展望社

土岐善磨（一九四五）『田安宗武 第三冊』日本評論社

土岐善磨（一九四五）『秋晴』八雲書林

土岐善磨（一九四六）『田安宗武 第四冊』日本評論社

土岐善磨（一九四六）『夏草』新興出版社

土岐善磨（一九四七）『冬風』春秋社

土岐善磨（一九四七）『京極為兼』西郊書房

土岐善磨（一九四九）『春野』八雲書林

土岐善磨（一九五〇）『宗武・曙覧歌集』朝日新聞社

土岐善磨（一九五八）『歴史の中の生活者』春秋社

土岐善磨（一九五九）『相聞抄』春秋社

土岐善磨（一九六〇）『額田抄』初音書房

土岐善磨（一九六八）『新修京極為兼』角川書店

土岐善磨（一九七二）『土岐善磨歌集』光風社書店

土岐善磨（一九七二）『京極為兼（日本詩人選15）』筑摩書房

土岐善磨（一九七五）『土岐善磨歌論歌話』上下巻 木耳社

土岐善磨（一九七六）『天の原ふりさけ見れば』蝸牛社

【謝辞】

本稿は、二〇一九年九月二十一日（土）に青山学院大学青山キャンパスにて行われた「戦争と『萬葉集』」研究会における口頭発表「一九四〇年代の土岐善磨」に基づき当日の参加者の皆様からのコメントを反映しつつ、『萬葉集』との関係に焦点を絞って書き下ろしたものです。ご指導いただきました小松（小川）靖彦氏をはじめ参加者のみなさまに感謝申し上げます。小松氏にはその後も電子メールでご指導を仰ぎました。また、歌人の森山晴美氏から善磨の短歌や資料の読みについての貴重なご教示を賜りました。善磨の著作についてはご遺族からの寄贈を含む日本近代文学館の蔵書を活用いたしました。あわせて感謝申し上げます。

（かわじ・ゆか／杏林大学特任教授）